

放課後子どもプランはなぜ必要か

千葉大学教授
明石要一



あかし・よういち 大分県出身。千葉大学教授、副理事。文部科学省中央教育審議会生涯学習分科会臨時委員、スポーツ青少年分科会臨時委員。「子どもの放課後改革がなぜ必要か」「データで語る平成の子ども気質」（明治図書）など著書多数。

放課後は「自由経済」、学校は「計画経済」

親の経済格差が子どもの学力格差を生む。今や経済格差は学力格差だけでなく、体力格差、それから栄養格差をも生むようになってきている。

それはなぜか。「体験量」が格差を生むのである。しかもその「体験量」は学校社会より「放課後の世界」で差が顕著になる。学校はよい意味での計画経済である。全国どの学校に行っても「よい教科書」と「よい教師」、それか

ところが、放課後の世界は自由経済である。子どもの体験量は親の経済的な「差」と地域「差」を直接に受ける。例えば、年収八〇〇万円以上の家庭の子どもは夏は海へ行き、冬はスキーに出かける。そして休日は家族みんなで出かける。さらに塾やお稽古にかよい、通信教育も受け、豊かな体験をする。逆に三〇〇万円以下の家庭（四割弱い）の子どもは夏、冬とも親が仕事で忙しいので外に出かけるチャンスが少ない。そして経済的な理由から塾やお稽古もかよっていない。放課後は独りで部屋でテレビと漫画、それからテレビゲームを友達として過ごす。

放課後子どもプランで体験量格差を是正

このように親の経済格差が子どもの放課後の体験量の「差」を生む。学校は計画経済なので家庭で生まれる格差を何とか是正できる。しかし放課後は自由経済なので放つておくと格差は拡大する。

そこで、子どもの放課後の体験量の格差を正にエネルギーを注がなければならぬ。政府が昨年からはじめた「放課後子どもプラン」は、そのような課題解決を目指しているのである。どの家庭の子ども、どの地域の子どもにも豊かな放課後の世界を提供する。自由経済の放課後から取り残された家庭や地域の子どもたちも含めて、豊かな体験を保障しようとするのである。全国各地でさまざまな機関・団体が放課後子どもプランを行っている。しかし、それは次のミッションをもっていることを忘れてはならない。どの地域のどの家庭の子どもたちにも豊かな放課後の世界を

ら「よい友達」が保障される。また、学校は休み時間と体育の時間、それから部活動を用意し、どの子どもにも体力をつける配慮をしている。そして、学校給食はどの子どもにも十分な栄養を提供している。栄養の格差が顕著になるのは給食がなかった四〇日間の夏休み明けである。家庭での食生活が子どもの栄養バランスを崩す。学校給食は家庭で生じた栄養格差を是正している。学校はどの子どもにも同じ体験をさせ、家庭で生まれる格差を是正しているのである。

等しく提供する。それが規制のない家庭や地域で生まれる格差の是正につながるのである。

放課後子どもプランの前に、文部科学省は全児童を対象とした地域子ども教室を三年間行ってきた。また、厚生労働省も留守家庭児童を対象とした児童クラブを行ってきた。放課後子どもプランは、それぞれの出自に違いはあるがそれらを統合・併存し全児童を対象にし、豊かな体験を用意しようとしている。幸いに横浜市の「キッズクラブ」や江戸川区の「すくすくスクール」、品川区の「すまいるスクール」、豊島区の「子どもスキップ」、それから岐阜市の「放課後チャイルドコミュニティ」などは留守家庭の児童とそうでない子どもたちの両方を視野に入れた子どもの居場所づくりに取り組んでいる。

例えば、岐阜市では「放課後子ども教室」（地域の大人の協力を得て交流と遊び場を提供する）、「放課後学びの部屋」（図書館を利用して読書や学びができる場を提供する）、「留守家庭児童会」（放課後の子どもの生活や遊び場を提供する）の三種類を用意している。そして、子どもたちは自分の興味関心にしたがって自由に「場」を選択できる。

どの放課後の「場」が一番よいかではない。子どもたちの置かれた環境と子ども自身の意志にまかせて選択させるのがよい。放課後子どもプランには強い規制はない。各地域の独自性にまかされる。それこそ金太郎飴にならないように創意工夫しなければならない。しかし忘れてはならないのは、放課後に生まれる子どもの体験量格差を是正する、というミッションである。